海蝶ノヘイ 16

吉川英梨

間近で見た「でかい」スーパーピューマに反省

『新東京水上警察』シリーズの執筆で海と船の話を書くようになってから、早5年……。いまや海に出てタグボートを見るだけで「かっこいい!!」と興奮してしまうようになりましたが、実は私、飛行機を見るのも大好きで、空港という場所も大のお気に入り。空港の近くまで来たら滑走路が見えるレストランに入り、離着陸を眺めながら執筆をするのが好きだったりします。

空港って、場所そのものがドラマなんですよね。私自身、米国やインドに長期滞在していたことがあるので、「初めて親元を離れて、米国に旅立った成田空港」または「現地でできた恋人を置いて帰国することになった某国の空港」などなど、遥(はる)か遠い20代のころの甘酸っぱい思い出が『空港』に詰まっています。スーツケースが転がる音、搭乗アナウンスを聞くだけで、心がキュンとします。

私のシリーズモノの中で最も賛否が多いのが、実在する（らしい）公安の秘匿諜報機関の女スパイの活躍を描いた『十三階』シリーズです。この第1作目『十三階の女』では、クライマックスのテロリストとの攻防の舞台に羽田空港のD滑走路を選びました。その取材のため、関係者以外誰もいないC滑走路わきの一般道を何キロも歩き……（実際に歩くと滑走路は長すぎました）、ようやく到着したD滑走路前で、しばし、離陸前の飛行機を眺めていたことがありました。2017年のこと、まだ海上保安友の会の理事の話をいただく前のことです。民間のジャンボ機が次々とD滑走路に侵入していくのを見送っていると……、

羽田航空基地の取材後に記念撮影。今井基地長（左から4人目）の左隣が筆者

おや、見慣れない飛行機が。

機体には水色と青のラインが入り、なんとも爽やかな雰囲気。日の丸が入っています。尾翼近くにコンパスマークも見えましたが、その時の私にはわからず、『JAPAN COAST GUARD』の文字でようやく、「あれは海上保安庁の飛行機か」と思い至りました。恐らく私が見たのは羽田航空基地の大型ジェット機ガルフでしょう。D滑走路を飛び立つのを見送りながら、「海保は巡視船だけじゃなくて、あんなでっかい飛行機も持っているのか。新東京水上警察シリーズで東京湾をこれだけ書いているのに、全く海保に触れないのはそろそろまずいなぁ」なんて、考えたものです。

さて、それから2年後の2019年5月。運良く友の会理事となった私は、特殊救難基地の取材後、羽田航空基地も取材させていただけることになりました！

当日は羽田航空基地の今井純一郎基地長自ら基地の説明をしてくださり、しかも現役のヘリ、飛行機の飛行士の方も呼んでいただいて、現場の話をたくさん聞かせてもらいました。

面白かったのが「これまでで一番まずいと思ったヒヤリハット事案ってなんですか」と尋ねた私に、飛行士のお二方が難しい顔になり、その場は張り詰めた空気に……。今井基地長の「俺の前で言えるわけないよなぁ」という一言で、どっと大笑いが起こったことです（笑）。言えませんよね、確かに。

格納庫で、間近にスーパーピューマを見たときには「小説の中で、こんなでかいのをガット船に墜落させてしまったのか」「リアリティなかったっすね～」と同行していた講談社の担当編集者と共に反省……。

羽田航空基地のみなさん、お忙しい中、取材に応じてくださってありがとうございました！

（つづく）

＝次回は3月11日号

小説の中でガット船に墜落「リアリティなかったっすね～」